

Vision's View

提言・展望

科学的介護記録法 F-SOAIP

～世界共通言語としてケア現場を改革する～

施設で暮らせるなら家でも暮らせる！誰もが望む当たり前の生活を、本人と家族の希望を中心に多職種支援により実現可能にする記録法「F-SOAIP」。日々の記録がケアマニュアルとして困難事例の課題解決と希望実現につながり、記録による情報共有が人材育成やケア環境を改革することが期待される。その内容について、実践者の河野礼子さんに解説してもらった。

**不安を安心に変える
即時実践可能なケア改革**

認知症基本法の制定により、認知症への正しい理解が求められ、尊厳の確保と共生社会の実現は支援現場の責務である。認知症当事者の発言や活躍の機会は増え、適切な支援により、社会生活の継続が実現できることも伝えられている。一方で、残念ながら、認知症診断後に適切な支援につながらず、本人の希望が確認されることなく在宅を離れ、入所や入院に至るケースも少なくない。

認知症は脳の機能変化であり、加齢や障害に伴い、誰にでも起きうる症状である。生活に支障が出ていることが問題であり、原因に対する本人の思いや要因へ適切な支援が行われることで改善や予防につながる。

生活障害の課題解決のため、当事者を中心とした多職種による根拠に基づいた効果的な介入を日々必要な最小限の記録で可視化し、科学的介護として実践可能にするのがF-SOAIPであり、この場を借りてその活用と効果につな

て提言する。
**尊厳確保と希望に寄り添った
根拠あるケアが改善を導く**

F-SOAIPとは、6つの項目に分類し、「F」支援場面に焦点を当て、「S」本人やキーパーソンの言葉・主観的情報に対し、「O」観察や他職種から得られたデータの客観的情報を得て、「A」記録者本人の解釈や判断アセスメントを基に、「I」介入・実施した内容を、「P」今後の対応として申し送ることのできる経過記録法である(図表)。

医療介護現場では、診断名から意思確認困難という先入観から、ケア側の時間軸で管理がされやすい。BPSD(認知症の行動・心理症状)の多くは、相手のパーソナルスペースや心情へ配慮を欠いた反応でもある。寝たきりのように無反応と思われる対象者であっても、相手の反応を確認し、伝わるコミュニケーションにより、会話が成立し協働動作を引き出すことは可能である。相手の反応を確認するケアは覚醒を促し、信頼関係を築き自立につながる。

転倒予防の拘束や過度の安静による筋力低下から立位困難になり、おむつ排泄を余儀なくされる高齢者も多い。誤嚥リスクを避ける胃ろう設置後は、抜去防止として拘束の必要性も予測される。ケアする側も、当事者の希望に寄り添い支えたいジレンマに日々葛藤する。「会話を楽しみ全量摂取」とは記録されず「食事中にムセあり」など注意喚起の記録は多い。

記録は有事における訴訟の資料になるが、記録から客観的に本人の言動も参照でき、自宅以外でも良い関係や社会性が維持されていた確認やグリーンケアにもつながる。地域包括ケアシステムでの契約やケア会議にてF-SOAIPの活用が、最期まで本人らしく生きるために必要なACP(人生会議)の実現にもつながり、本人主体の多職種協働による最善をめざす生活支援を導く。

**世界の課題解決につながる
人材育成プログラム**

改善や回復をめざすケアは自立促進効果も高く、認知症予防にも効果的である。日々の記録が生活

り、世界標準モデルへの期待値は高い。医療福祉ジャーナリズム分野の大学院生として世界発信をめざしたい。

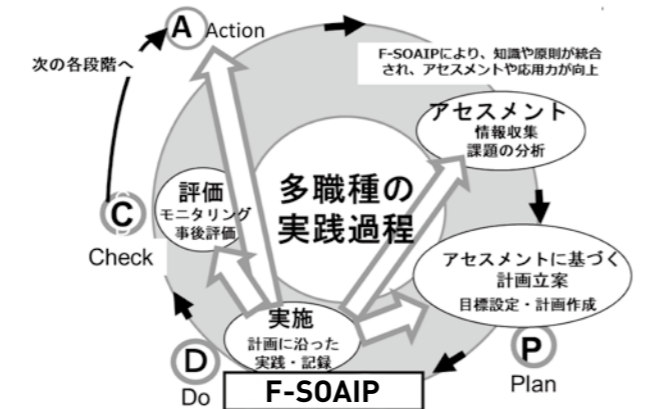
図表 F-SOAIP(エフソ・アイピー)とは

保健・医療・介護・福祉・保育・心理・教育・司法のための経過記録法。
Life Model Process Recording Method for Health Care, Social and Human Care

[F-SOAIPで用いる6項目]

- F: Focus(着眼点)**
ニーズ、気かり等。タイトルのようにその場面を簡潔に表現する。ケアプランの目標・課題やプランと連動。
- S: Subjective Data(主観的情報)**
利用者(キーパーソンを含む)の言葉。キーパーソンの場合、S(関係や続柄)と表記する。
- O: Objective Data(客観的情報)**
観察・状態や他職種から得られた情報、環境・経過等。
- A: Assessment(アセスメント)**
援助者(記録者本人)の判断・解釈。気づきや考えを記載する。
- I: Intervention/ Implementation(介入・実施)**
援助者(記録者本人)の対応。支援、声かけ、連絡調整、介護等。
- P: Plan(計画)**
当面の対応予定。

PDCAサイクルを促進するF-SOAIP ～PDCAサイクルとF-SOAIPとの関係～



実施段階をF-SOAIPで記録することにより、多職種の実践過程(PDCAサイクル)を促進
出所：社会福祉振興・試験センター『カイゴのチカラ』(No.125、2022年8月号)

改善プログラムとしても有効であるため、記録者自身が進んで最新の状態へ反映させる。今年度の医療・介護・障害福祉サービスのトリプル改定においても、F-SOAIP活用により、生きづらさを抱える多くの対象者に適切な支援が提供可能になる。尊厳を確保され、主体的な人生選択による伴走型共生社会の実現につながる。F-SOAIPは、項目別記録のシステム的に教育効果があり、BCP(事業継続計画)対策や事業分析としての情報共有も含め、多面的に活用可能である。AIの分析や簡易化された記録は外国人材にも判読・実践しやすく、DX化によりデータとしてもさらに価値あるものとなる。介護分野ではLIFE(科学的介護情報システム)による検証、また医療計画のロジックモデルの指標として全国に導入されることにより、住民の声から派生するPDCAサイクルに基づいた社会保障システムへの効果にも期待が高まる。

Profile

河野礼子 Kono Reiko

リハビリ型デイサービスリハサロン祖師谷施設長。国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究所医療福祉経営専攻・医療福祉ジャーナリズム分野修士課程1年(指導教員:大熊由紀子教授)。心原性脳梗塞後に失語症や認知症を発症した服薬・通所・支援拒否の長期家族介護経験から、最小の介入が自立につながる認知症改善を検証するため、産後2週間で2016年、施設開業。根拠を証明するため准看護師・看護師資格取得。ケアによる改善効果を科学的に検証発信するため大学院へ進学

一般社団法人 F-SOAIP 実践・教育研究所 / Institute of S-SOAIP